

# 時代の風 西水美恵子 元世界銀行副総裁

初夏の数日間、ブータンのトプゲイ首相が初めて公式に日本を訪問した際、「国民総幸福量」がメディアをにぎわした。日本ほどのトピックが庶民の関心事になる国を、私は他に知らない。なぜだろうと、思いをめぐらしている。

前国王の雷龍王4世が、即位（1972年）後初の海外メディアインタビューで「国民総生産量より国民総幸福量のほうが大切だ」と語り合わせをした。以来名称は定着したが、数値を連想させるせいも、その真意は広く知られていない。

実際、国際機構や、世界各国の官民研究機関が、いろいろな手法を用いて国民の幸福度を推測し、国際比較もやっている。が、国民の幸福度をおおよそでも捉えているのかと心配するのは、私だけだろうか。

## 憲法に幸福追求の権利

専門的な話にするつもりは毛頭ないが、国家経済の総生産量を測る場合は、生産と投入（労働、資本など）の関係を表す生産関数が理論的な足場となる。国民の幸福度を測る場合、そのような土台はどこにあるのだろうか。幸福の心理構造に関する理論的根拠は経済学の域を超えるから、不勉強なエコノミストの私には見当

# 日本 ブータンとの差は

もつかない。

心理学や脳科学の専門家によると、幸福の心理は人によって異なると考えるのが妥当らしい。たとえたとえ個人幸福度を測れても、国民総幸福度の合計はできない。異質なものを足し算は、不可能。国民総

生産のように、市場価格がリンゴとバナナの足し算を可能にするというわけにはいかないのだ。

理論的な骨組みがしっかりしていないと、データは真実を語らない。その上、結果の是非がどうあれ、数字は必ずものを言う。ピーター・ドラッカーが「計測されるものは管理される」と論じたそうだが、しかり。

国民の幸福を無理に数値化して間違った指標が管理されると、政策に悪影響を及ぼすリスクが生じる。用心に越したことはない。

国民総幸福量は価値観。あの国の王家に代々伝わる政治哲学である。ブータンの国民総生産量に関する質問に「国民総幸福量のほうが大切だ」と答えた4世の真意は、国家安全保障戦略

にあった。インドと中国に挟まれる人口70万人ほどの小国を守るには「ブータンに生まれて本当によかった」と本気で言える人心のみと、考えるからだ。

小国にふさわしい武力抜きで、戦略と言えはそれまで

だ。が、日本史に残る武神・武田信玄の戦略「勝利の礎」（「人は城、人は公僕として仕える庶民の目を通して見ること。問題やその神髄が見え難い」「上から目線」はご法度。国主自ら全国各地をくまなく歩き回るルールモデルで、「草の根から遠い政治はすなわち悪政」と、早くから地方分権を推進してきた。

もう一つは、常に包括的な観点で公務に臨むこと。ルールモデルの口癖は「幸せは本来包括的なものだ。日常生活の現実も、民の幸福も、省局など政府組織の

境界線に都合よく収まりなごしなさい」。むしろ「縦割りは禁物、チームワークをどこも重んじる。

ブータンは桃源郷ではない。間違いも多く、実践は終わりのない学習の道だ。今は、新国王雷龍王5世のリーダーシップのもとで、哲学・国民総幸福量を黙々と追求し続けている。

日本国憲法は「幸福追求」を生命と自由と共に国民の基本的権利と見なし、「公共の福祉に反しない限り」、立法その他の国政の上で、最大の尊重を必要とする」とうたう（第3章13条）。

ブータンという国を知ってから、日本政府は本気で憲法を守っているのかと疑うようになった。ひょっとすると、わが同胞の鋭敏な直感が、「国民総幸福量」に私と同じ渴望を覚えるのかもしれない……。



—竹内紀巨撮影

仇は敵なり」と同質の思想だ。国王直筆の勅令には「ブータンの外垣も国富も同じく国民である」と、幾度も繰り返されている。

具体的に、この政治哲学は、政策と公共機関の使命を、民の幸福追求を妨げる公的障壁を取り除くことに置く。幸せも、それを邪魔